

## 2015 年度

### 第 4 回 こどもコミュニケーションフォーラム考察

浅川 陽子\*・城一 道子\*・大塚 紫乃\*  
木村 文香\*・松田 清美\*・山路 進\*  
氏原基余司\*・守屋 志保\*・落合 洋子\*

#### 1. こどもコミュニケーションフォーラム について

こどもコミュニケーションフォーラムは、子どもの成長過程を見据え健全な成長を導くために、子ども、家庭、学校、地域、その他の社会的関係をつなぎ、相互に協力、情報交換をする人々の学びの場である。このフォーラムでは、参加者が学究的な情報や教育研究の成果に学び、子ども・子育て支援や保育・児童教育に貢献する営みへの持続的な関心・意欲を喚起することを目標とする。

そして、こどもコミュニケーション研究センター（以下、研究センター）は、子どもの育ちの解明を、保育学、教育学、心理学、情報学、社会学を基礎として異なる専門分野や実践家と協働しながら行うとともに、よりよい保育、教育のための研究を推進する組織として 2014 年に誕生した。江戸川大学におけるこどもコミュニケーション学に関わる研究を統括して学生の教育に還元することや、地域社会におけるこどもの保育、教育及び子育て支援に関わる事業に貢献することを目的とする。

研究センターは設立して以来、保育、教育に関する現代的なテーマでのフォーラムや研究会を企画・運営してきた（第 1 回から第 3 回の詳細は

2013・2014 江戸川大学教職センター紀要を参照）。

2015 年度は、江戸川大学の学園祭（駒木祭）に合わせて第 4 回こどもコミュニケーションフォーラムを計画した。内容は、第 1 部として、英語絵本の読み聞かせワークショップ、第 2 部として、2 日間にわたる『たからものがいっぱい!』絵本原画展と、絵本作者こやま峰子氏を招いてのお話会である。

#### 2. 第 4 回こどもコミュニケーション フォーラムについて

##### (1) 経緯と目的

昨年度は、学園祭の中に位置づけるコミュニケーションフォーラムを学科学生の教育の場と考え、保育系大学生としての汎用的技能習得・活用の場として内容を構想した。学生の「主体性、コミュニケーション、こどもや親とかかわる体験と思考」を組み込むワークショップ型フォーラムを試みた（2014 教職センター紀要）。

しかし学園祭とは、本来、学生の能動的な参加が前提であり、共に何かを作りあげる喜びや苦勞、そこに生まれる団結等が後の思い出となる学生主体の学園行事である。

私たち教員が、1 年生必修科目の複数の授業の流れのなかに各活動を位置づけてゆき、フォーラム当日を学生の学びの成果発表的な場としたこと

\*江戸川大学こどもコミュニケーション研究センター

によって、学生の全員参加の学習活動にはなつたが、個々の能動性の涵養という意味では不適切であった。やらされている感が楽しいお祭り日にはそぐわなかつたようで「来年の学園祭では自分たちで何かを計画したい」という、前向きな反省の言葉が学生達からは聞かれたものである。さらに、フォーラムまでの学びのデザインが適切に綿密にできなかつたという教員側のカリキュラム・指導上の問題もある。

一方、成果としては、複数の授業を教育内容面で有機的につなごうと努力したことによって、専門性の異なる教員同士の授業連携の機運が生まれた。学生の資質・能力を高めたり活かしたりするためには、教員の交わり（学生の学びの質に焦点化したコミュニケーション）と協働作業（何でも言えるフラットな関係・雰囲気）が重要であるということが、教員自身にとって実感的に確認されたのである。

以上の振り返りから、今年度はこどもコミュニケーションフォーラムの性格を問い直すことからスタートした。もちろん学生の教育の場として機能させる努力は必要であるが、それを主目的にはせず、むしろ研究センター教員の研究実践発表の場としての色彩を強めたい、と私たちは考えた。なぜならば、こどもコミュニケーション学科が新しく認知度が低いこともあり、学科教員の研究実践の特色を、地域の方々も多く集う学園祭で公開することは、学科の持ち味を広報することにもつながり、その意義は大きいと思われるからである。

このような経緯をもって、第4回こどもコミュニケーションフォーラムの目的と内容を構想することとなった。

## (2) 日時と概要（第1部・第2部ともに無料）

### 第1部 英語絵本の読み聞かせワークショップ

日時：11月3日（祝）10時半から12時  
場所：総合情報図書館ネコモンズ（B棟2階）  
定員：20名  
趣旨：こどもコミュニケーション学科（研究

センター）城一道子教授によるワークショップ。英語絵本を読む楽しさを体験しましょう。

対象・英語絵本に興味がある方  
・英語絵本を読みたい方  
・英語の学びなおしをしたい方

### 第2部 絵本『たからものがいっぱい！』原画展 & こやま峰子先生おはなしの会

#### ① 原画展

日時：11月2日（火）3日（祝）  
駒木祭期間中 常設  
場所：D棟3階 341室  
趣旨：詩人で絵本作家のこやま峰子氏の絵本『たからものがいっぱい！』（フレール館）は、キューバの子ども達が描いた「たからもの」の絵が出発点。

こどもコミュニケーション学科（研究センター）浅川陽子教授の絵本研究仲間のおやま氏が、キューバで取材し、子ども達の絵にことば（詩）を加えて絵本をつくりました。エネルギーな絵（原画）からみえてくる、私たちが日頃忘れかけている「大切なもの」を一緒に考えてみましょう。

#### ② おはなしの会

日時：11月3日（祝）13時から15時  
場所：原画展と同じ  
趣旨：作者であるこやま峰子氏をお迎えし、絵本『たからものがいっぱい！』に込めた思いや、作品づくりについてのお話を伺います。

対象・絵本に興味がある方  
・キューバの子どもについて知りたい方  
・絵本作家とお話したい方  
・小さいお子さん同伴可（お絵かきコーナーあり）

#### 【学科学生の関わり】

1年生については、駒木祭は出席にカウントされる。そこで、原画展に必ず足を運び、絵をじっくり見て「感想用紙」に気づいたことなどを書いて

て提出することとした。ほぼ全員が参加した。

さらに、絵本をつくった作者のお話を聞きたい学生には「お話し会」に出るよう促した。実際にお話し会に来た1年生は有志4名であった。

2年生については、英語絵本読み聞かせワークショップの受付や補助、原画や絵本の展示や案内、来室する子ども達のお世話をするための有志を募集した。8名の参加であった。

関心ある学生を募ったことにより、興味深く関わり学ぼうとする姿が見られた。

### (3) 英語絵本の読み聞かせワークショップ

小学校で外国語活動（実質は英語活動）が必修化されたのを機に早期英語教育に関心が集まっている。「英語絵本読み聞かせワークショップ」は、子どもには英語を身につけてほしいという大人の願いを子どもに押し付けず、大人も子どもと一緒に英語を楽しんで学ぶことができることを知ってもらう機会を提供しようという企画である。本学科の学生は1年次から保育園や幼稚園の子どもたちと触れあう体験の機会が多くあるが、その中の一つに英語の選択科目履修者を中心とした英語活動がある。体を動かしながら歌や歌やチャンツ、絵本の読み聞かせや絵本の物語を土台にした英語劇などを子どもたちと行っている。英語が得意な学生ばかりではなく、むしろ中学・高校では英語を苦手と感じていた学生がほとんどであるが、英語活動は楽しいという。英語は苦手、発音は下手だからと尻込みせず大人にこそ英語を口にする楽しさを味わってもらうことがワークショップの趣旨である。

ワークショップの内容は、次のとおりである。

- ① Rhyming (ライミング)―発声練習1:「口を動かす」
- ② Chants (チャンツ)―発声練習2:「リズムよく、声を出す」
- ③ “Yo! Yes!” (by Chris Raschka)―対話をしよう1:「Yesにもいろいろな気持ち」
- ④ “Lemons are not Red!” (by Laura Vaccaro Seeger)―対話をしよう2:「発音がきれ

い」よりも「感じ」を込めて

- ⑤ “Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?” (by Bill Martin Jr & Eric Carle)―絵本を読む1 (パターン・ブックスから)
- ⑥ “Very Tall Mouse and Very Short Mouse” (by Arnold Lobel)―絵本を読む2 (アメリカの小学校1年生の教科書から)

入れ替わりで見学者の来場はあったが、ワークショップの参加者は9名で、その内訳は、70代1名、60代2名、50代2名、40代3名、20代1名であった。大学・法人関係者が3分の2を占め、一般からの参加者は3名であった。参加者数がそれほど多くなかったことで、初めて読み聞かせを体験する参加者に個別に対応することができたことは結果としてよかったと感じられた。

アンケート結果によると、ワークショップへの参加理由は、英語絵本への興味・関心はあるものの、必ずしも読み聞かせに興味があったからではなかったようであるが(表1)、参加者全員に英語絵本の読み聞かせを自分でもやってみたくて関心をもってもらうことができた(表2)。発音に自信がないという参加者も、子どもはよい発音を

表1 ワークショップ参加理由

英語絵本に興味がある	4
英語絵本の読み聞かせをしてみたい	4
英語絵本を子どもと楽しみたい	5
英語教育に関心がある	4
英語を学び直したい	4

(人数:複数回答)

表2 ワークショップに参加して

楽しかった	5.0
ためになった	5.0
英語絵本の読み聞かせを自分でもやってみたくて思った	5.0
難しかった	2.7

(5段階尺度)

聞き分けることができるのでCDを併用すれば日本人の発音でも心配しなくてもよいこと、何より身近な大人が絵本を楽しんで読むことが子どもにより影響を与えることを理解してもらうことで、楽しく活動に取り組むことができたと思われる。

このような催しは定期的に開催することで広く関心を喚起することができるようになるものであろう。英語絵本の読み聞かせ講習会のような機会があればぜひ参加したいという声が今回の参加者から聞かれた。

#### (4) 絵本原画展とおはなしの会

##### ① 絵本原画展の内容とアンケート結果

原画展では、学園祭の2日間、展示室の壁に沿って約30点の原画を展示した。作品タイトル、作品にあわせて作られたこやま峰子氏の詩を立てかけて、来場者は自由に見ることができるようにした。入退出は自由で、退室時にアンケートに協力していただいた。原画は、絵具やクレヨン、鉛筆等を用いてさまざまな画法で描かれ、色鮮やかであった。作品の大きさも大小あり、キューバの子どもたちの躍動を感じるような空間を作ることができた。来場者は一つ一つの詩と絵をじっくりと見て周り、どの絵が好みか、意見を交わす様子も見られた。

アンケートの回収数から見た2日間の原画展来場者は95名であった。年代は、19歳以下が最も多く、50名であった。その他は、20代22名、30代4名、40代11名、50代5名、60代以上1名、不明1名であった。大学生が58名と多かったが、一般の大人の方の来場も22名見られた。

来場理由と情報入手方法は表3と4の通りである。結果から、絵本や絵に関心を寄せて、来場したことが窺える。子どもが楽しめそうという理由で来場した方が最も多く、学園祭での子ども向けの催しが期待されていると推測される。こどもコミュニケーション学科の特色を打ち出す、良い機会となり得ることがわかったが、広報の仕方についてはさらに工夫が必要である。

来場者の感想を表5にまとめた。色鮮やかで、

表3 原画展来場理由（複数回答）

来場理由	人数	割合 (%)
1. たからものがいっぱい絵本が好きだから	8	7.5
2. 絵本全般が好きだから	21	19.6
3. 絵が好きだから	17	15.9
4. 子どもが楽しめそうだから	34	31.8
5. お絵かきができるから	2	1.9
6. その他	25	23.4

表4 原画展開催の情報入手方法（複数回答）

情報入手方法	人数	割合 (%)
1. ポスター・チラシ	17	17.9
2. インターネット	4	4.2
3. 学園祭当日に	59	62.1
4. その他	14	14.7

子どもの個性が現れた絵に、心動かされたことが分かる。

「キューバのお子さんの絵からはパワーが出ているようなインパクトがありました」、「最初に見たときに日本の絵と感じが違うなと思いました」といった感想から、絵を通して、キューバの子どもたちへの関心を寄せることができたと思われる。また、「明るい色使いが多くて見ていて心が温まった」「心が和みました。やさしい気持ちになれた気がします」といった感想から、絵からのパワーを感じ取ることができたと思われる。子どもの描く絵の力強さ、子どもの感性の素晴らしさが伝わり、原画展を通し、「たからものがいっぱい！」の絵本のテーマを表現することができた。今回の原画展の成果が感じられる。

来場の理由として、「子どもが楽しめそうだから」という点が上げられているが、子どもと同伴して来場した方は約12組であった。一般の方に情報が伝わるよう広報を行うことが、今後課題と

表5 原画展来場者の感想（抜粋）

所 属	感 想
高校生	素晴らしかったです。子どもが書いたとは思えませんでした。
大学生	2回も来てしまった。私たちより下の子が書いているのはびっくりしました。とても才能があるんだなと思いました。
大学生	明るい色使いが多くて見ていて心が温まった
大学生	いろいろな国の素敵な子どもの感性に触れることができ、学ぶことも多くあり、よかったです。
大学生	色々な宝物があるのだなと思った。自分より年齢が下の子達なのに絵がとても上手かった。色々な画法で描かれていてよかった。
大学生	おもしろい絵がたくさんあった。カラフルでした。絵が描きたくなりました。
大学生	心が和みました。やさしい気持ちになれた気がします。
大学生	子どもなのにとても絵がうまいと思った。その国の雰囲気が表示されていた。
大学生	最初に見たときに日本の絵と感じが違うなと思いました。特に自分が気に入った絵はかぞくの絵です。すべての絵、共通で楽しそうでした。
大学生	自分より年下の子がきれいな絵を描いてて驚いた。絵が上手かは恵まれた環境が必要かではなく、心の持ちようなのかなと感じた。
大学生	全部の絵が個性的で表現力にあふれていて、素晴らしいと思った。子どもならではのものだなと思った。
大学生	沢山のいろんな絵があり、上手い下手ではなく個性としてその人が出ているように思った。暖かい気持ちになれた。
大学生	小さい子達なのにユーモアがあふれていてすごいと思った。日本人が書いているのと少し違って、顔がはっきりしていた。色の使い方もはっきりしていて、色鮮やかでした。書いている顔も外国人っぽい顔だった。
大学生	発想力やアイデアがたくさん含まれていて心をゆらされた
大人一般	色使いがきれいな絵が多く、楽しませていただきました。
大人一般	絵を見ることはあまりないのですが、これを機に好きになりました。
大人一般	可愛い絵本がたくさんあって楽しめました。
大人一般	子どもながらきれい
大人一般	子どもの絵のレベルが高く、驚きました。
その他	年に関係なくクリエイティブな絵が沢山あって驚きました。みんな色がカラフルで素敵でした。
その他教員 (小・中・高・大)	インターネットで本日のことを調べているうちに沢山のイベントの中から「ぜひ拝見したい」と思いました。キューバのお子さんの絵からはパワーが出ているようなインパクトがありました。素晴らしい原画を見るチャンスを得られ、感動いたしました。とても感動しました！

なる。

② おはなしの会の内容とアンケート結果

おはなしの会では、こやま峰子氏から、キューバの社会・歴史的背景について伺い、「キューバでは子どもたちが宝である」というお話と共に「たからものがいっぱい！」の絵本の制作時の想

いや願いを伺った。また、キューバの子ども達が絵を描く様子を、スライドを使って説明していただいた。最後に、参加者同士で絵本の詩を読み、子どもたちの宝物について考えをめぐらせる体験をした。

おはなしの会を開催中、お絵かきコーナーも開



絵本原画展の様子



こやま氏からキューバ取材の話聞く



フォーラム会場入り口

設していた。子どもを同伴した親も来場し、子どもを見守りながら、こやま氏のおはなしに耳を傾ける様子が見られた。

大人の来場者数は、19名であった（途中入場を含む）。10組の親子が来場し、就学前や小学校のお子さんを同伴していた。当日に情報を得て来場した方が大半であった。

おはなしの会への感想から「今まで見えていな

かったものが見えたように感じた」「先生の詩がどんな風に作り出されていくのかが分かった」「キューバの人々の心の温かさ、おおらかさがこやま先生のお話で伝わってきた。絵に添えてある詩も心を打つものばかりで、とてもよかった」といった声が聞かれた。

おはなしの会に参加することを通して、キューバの子どもたちに思いをめぐらせ、詩を存分に味わうことができたといえる。

来場者の描いた宝物の絵は、展示を行った。大学生や子どもたちが絵を描き、14枚の絵を飾ることができた。お絵かきを目当てに来場する方も多く、原画に囲まれて絵を描く体験を提供できた。おはなしの会と同時に絵かきコーナーを設けたことは、子どもを連れた親の来場を促し、利点はあった。一方で、親が十分に集中しておはなしを聞けないという難点もあった。対象者を明確にして、フォーラムとしての催しを企画することが、今後の改善点である。